
神騙り

絢無晴蘿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神騙り

【Nコード】

N3813BA

【作者名】

絢無晴蘿

【あらすじ】

この世界は、歪んでいる。

風の舞姫が会おうのは、

セイを騙る死者、

未来を語る占者、

一族を騙る錬金術師、

存在を騙る巫女、

本心を語る陰陽師、

そして、すべてを騙る暗殺者？

これは、守れなかったモノ達の物騙……

「なんて、意味深なこと言ってるけど、ぶっちゃけうちらが事件に巻き込まれたり、解決したり、振り回されたりするはなしです」

「え、あらすじ、うそなの？！」

「う、嘘じゃないよ！」

みたいな感じで、主人公がまったく活躍しない物語の始まりはじまり！

始まりの物語

永久と言われた神世は終わり
狂い狂って五千年
既に現は人の世と為る
愁いな年月巡り廻って
神の定めた運命は
全て歪に歪んでく

剣と魔法の世界
フィーア

その世界で語られるのは
枉げられた事実
そして騙られるのは
壊れ果てた真実
そんな終わりの始まりの
モノガタリ

名を言っていなかったわね
私の名は、シエルリーズ
この世界、フィーアの案内人
さて、悪夢から目覚めた王は
何を視る？

そして
何を選ぶ？

これは、もう始まってしまっていた物語……

これは、もう終わってしまった物語……

だとしても、僕は、騙り続けるよ
アルト……

始まりの物語（後書き）

超長編小説となります。

よければ、お付き合いください。

00-01-00 プロローグ Mside

「どういう事なんですかつ!!」

ドアを蹴破る勢いで、いや、蹴破ってメガネをかけた青年が部屋に入ってきた。

その部屋には中央に接客用のソファと机が置かれ、脇には本や資料がところせましと詰め込まれた本棚が置かれ、南側の壁には、青年が入ってきた物とは別の扉があった。

ここは皇館。星原のエース代理、クイーンの私部屋であり、接客にも使われている部屋である。

その部屋にいたのは、ソファに堂々と座るこの部屋の主。

金髪碧眼の少女、クイーンであるラピス・カリオン。

そしてもう一人……露草色の瞳のまだ幼さの残る少年。

「来てくれてうれしいわ。とりあえず、どうもこうも、こういう事だけど」

目の前に座る少年を指さして困ったように言う。

「陸夜さんに言いますよ」

青年は半眼でぼそりと小さく言った。

「……う、そ、それについてはもう手は打ってあるわ」

動揺は一瞬で、ラピスはまっすぐと青年を見る。

「残念ながら、陸夜には少し遠くに行ってもらったから。カリスとアイリスの式神でも連絡するのに、二・三日はかかるでしょうね」
「なっ!」

タイムリミットは後四日。

それまでに何とかしなければいけないと言うのに、陸夜を呼ぶだけで二・三日では、絶対に間に合わない。

「私だって、こんな事やりたくなかったのよ。でも、メルに正式な依頼として出されちゃったから、受けるしかなくて……」

「だからって、なんでこの馬鹿の為にマコトが命を賭けなくちゃいけないんですか!!」

青年の指さす先には、黙ったままの少年。

「まったくです」

と、部屋に居る三人以外の声が聞こえる。

声の主はどう見ても部屋の中に居る筈なのだが、居ない。

しかし三人はそれに動じず、まるで誰かが居るかのようにごく自然に受け止める。

「何故、我があるじがこんな馬鹿の為に」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに部屋にはいなかったはずの四人目が現れた。

光を反射するのか、揺れるたびに色が変わる不思議な光沢の長い銀髪に、その髪色と同じ瞳。

人外の美しさを持つ少女。

まるで最初からそこにいたように、ラピスの座るソファの後ろに立っていた。

「お、俺だって、好きでこんな事しているわけじゃないんだけど……」

露草色の瞳を持つ少年が、ため息をつきながら言った。

「いっそのこと、あのまま消滅してメル様が王に即位すればよかったと思います」

ようやく口を開いた少年に、少女は容赦なく言葉で叩きのめす。

「ヒドっ!!」

「……分かりました。この依頼、受けてやりますよ」

青年が笑いながら言った。

「あの、目が笑って無いんですけど……」

「私も、行きます」

少年の声を無視して、少女も決意を秘めた声で言った。

「そう。ありがと。場所なんだけど、たぶん大和国のこの地域」
脇に置いてあった地図を広げて目的地を指す。

「……白峰の地？ いや、ここは常盤の森ですか？ 確か、小さな村があつたはずですよ」

青年の問いに、ラピスは頷いた。

「翠螺の村……土地神を祭る、小さな村よ」

「待つて」

少年と少女が部屋を出て、それに続こうとした青年をラピスは呼びとめた。

「なんですか？」

「……この件かどうかは分からないけど、音川の姫が翠螺に乗り出したそうよ」

「おと……かわ？」

「シルフの娘が」

「え」

真っ青になった青年は、ただ茫然と呟く。

「それは……いろいろな不味いかもしれない」

00-01-00 プロローグ Aside

「くっしゅん!!」

「噂か？」

常盤の森、翠螺の村へと続く道を歩く旅人らしき人が二人。
先頭を歩くのは十五・六歳程の少女。何故か巫女装束で、手荷物はなし。

大和国では珍しい栗色の髪をポニーテールに結んでいる。
しかし、何より印象的なのはその独特の瞳だった。

一度見たら忘れないような黄色みがかった鮮やかな赤。
そんな少女は着の身着のままでのほほんと歩いている。

その後ろに続くのは、少女よりも年上のような少年。

少女とは対照的で、旅人の着るような着物に荷物。

腰には古そうな剣。黒髪黒眼の大和国では標準的な容姿。

そんな二人の旅人は、一人っ子一人いない道を歩いていた。

「ちよつとはり！普通ここは、寒くない？とか、なぜ？とか聞くものじゃないの？」

先ほどのくしゃみはこの少女だった。

「大丈夫。アルトは風邪をひかない類の人だから」

笑いつつ、少年は答えた。

「え、そうなの?!聞いた、らいか!?!あるとって、なぜひかないんだって!!」

少女……音川アルトが嬉しそうに話すと、すぐ横に手のひらに乗るサイズの少女が現れる。

真っ赤な中華服に黄色の髪、同色の瞳は呆れてアルトを見ていた。

「いやいや。アルト、ばかにされてるって」

普通に会話しているが、彼女は雷を司る精霊だったりする。

何故精霊が人間と一緒に行動しているのかとかは長くなるので略ちなみに、羽やら翼やはついていないが浮いている。

本人いわく、ああゆうの邪魔なんだよね。との事。

「まったく、馬鹿になんてしてない。事実を言ったままだよ」

そんな精霊と平然と話す少年は千引玻璃。

アルトの友人だった。

「……一層立ち悪いんだけど」

「え？どゆこと??」

天然少女と雷の精霊そしてその友人、。

そんな二人、改め三人組が目指すのは翠螺の村。

頭上の遥か彼方で三人を監視する存在に気付く事も無く前を進んでいく。

晴天の空のもと、確実に事件は始まっていた。

「まったく、シルフはなにを考えているの？」

木々の上で、そんな旅人の様子を監視していた精霊は、長い髪をかきあげて呟いた。

彼女の周りで、風が激しく吹く。

「……監視ね」

音川アルトを、睨みつけた。

彼女が、物語の舞台に上がる時はほど遠い。

00-01-01 常盤の地、神隠しの森

1

音川アルトと千引玻璃は翠螺の村に来ていた――
大和国、白峰山の越えた先の『常盤の森』のはずれにその翠螺の村がある。

森は、常盤と言われるだけあって一年を通して緑が絶えない。

また多くの自然がある事から、精霊や妖精、神霊が多く存在し、さらに土地神の加護もあって辺鄙なところながらも意外と大きな村があるとアルトは聞いていた。

そう、聞いていたのに……。

「だれも、いない……?」

木材で作られた家。よく耕された畑。どこの村でもありそうな風景。ただ、言いようのしない違和感が村全体、いや、森も含めてこの場所全体を包んでいた。

……人が居ないのだ。

夜などならともかく、今はまだ朝早く、農業をしている者なら何かしら作業をしてもおかしくない時間帯だが、本当に誰もいないのだ。

思わず隣にいた玻璃を見た。

「遅かったか……」

アルトと玻璃、この二人が翠螺の村に来た理由、それはアルトに昨日届けられた手紙であった。
その内容とは……

『ヤッホーお母さんです。
なんか常盤のほうが大変な事になってるみたいだから行ってちょ。
原因解明と事件解決お願いね☆
あ、神隠しですとさ。』

とのことであった。

因みに、半年ぶりに来た手紙の内容である。

ふざけた手紙だが、母からの手紙。

母からの命令である故に、止める兄を振り切って玻璃と共にやって来た。

むしろ、行かなかつたら大変なことになる。

「村ゼんたいを巻きこむ神隠しって……」

家の中を見ても誰もいない。

畑には、つい先ほどまでいたかのように鍬や鎌などが置かれたままだ。

「……」

黙って玻璃も違う家の中を見るがやはり、誰も見つからない。

本当に神隠しなの？

もし神隠しだとしても、本当にアルトと玻璃だけで事件解決なんて出来るのだろうか？

それも踏まえて、母は手紙を出してきたのだろうけど、それでも心配だ。

「ねえ、アルト。ここ、ヤダ。……おかしいよ」

「らいか？」

突然左そでをつかんだらいかが泣きそうな声で行った。
怯えている？

「ここ、『誰』もいない、よ」
「？」

誰もいない。

「あ……っ！！」

言いようのない違和感。それは、人が居ないだけではなかった。それは……

「精霊も、妖精も、『誰』もいない」

「っ！？」

先ほども言ったが、ここは自然が多く精霊や妖精たちが多く存在している。はずなのに、見渡す限り影すらも見つける事が出来ない。気付いてしまうとまるで異界の地に来てしまった、そんな感覚が襲ってくる。

『誰』もない場所が、ここまで空虚だったなんて。

アルトと玻璃、そして雷華しかないこの場所が、異界のように感じてくる。

「ここで……」

何が起こっているの？

そんな疑問を口にする前に、異変が起こる。

……霧だ。

森から全てを包み込むように霧が、地を這い木々の間から侵食して来たのだ。

カタ。

「なにか、音が……？」

何かが打ち鳴らされる音。

何かがこする音。

何かが草をかき分ける音……？

「アルト、戻って。ここは危険だ、帰った方がいい」

玻璃はアルトを庇うように一歩前に出る。

姿の見えない敵を感じたのだ。

「……いやだよ。あるとは神隠しを止めるために来たんだもん」
玻璃と並んで、抗議の声を上げる。

「それに、アルトには雷華が指一本触れさせないんだから」

バチバチと静電気を発しながら、雷華がアルトと玻璃の間に入った。
「もちろん。オオカミにもね」

「……………」

「おおかみ？」

静かに玻璃をにらみつける雷華。それを軽く受け流していると見せて内心冷や汗をかきまくっている玻璃。それを不思議そうに眺めるアルト。

そんな事をしている内にも、音は近づいて来る。

「とにかく、迎え撃ってやるんだから！！」

「いっけーアルト！！ 雷華は応援してるー」

「……応援かよ」

若干ため息をついた玻璃は腰にさした剣を抜いた。

「あ、きちんとサポートもやるわよ？ だって、アルトは私の大事な契約者だもん」

雷華の周りに光が集まり少しずつ大きくなる。

「だったら、きちんとアルトを守れよ」

「当たり前でしょ！」

その間にも音は近づき、遂に、音の出どころであるヒトビトが、森から現れた。

森の間から現れたのは……。

「な、なんだ、こいつら！！？」

黄色く黄ばんだ人のようなモノ。それは……。

「……ほ、ほね？」

人体模型のような言葉通り骨だった。

人の骨。

それが、動いている。

原理がわからないが、なぜか動き回っている。

しかも、次々に森から現れる。

それだけでも嫌悪感を催すと言うのに、その骨たちは手に物騒なこ

とこの上ない斧やら鉋やらを持っていだ。

金属と金属がぶつかる音が響いた。

玻璃の剣と骨が振りあげた鎌が打ち合った。

若干戸惑いながらも玻璃は骨たちと拮抗して立ちまわっているが、なにしろ数が多い。

そんな玻璃を補助するためにアルトは舞う。

音川の風巫女、風の舞姫、音姫……アルトはそう呼ばれる。

音川家は代々舞を白峰山の土地神、白峰の神に奉納する巫女の一族の一つである。

その始まりは、五千年以上昔とされている由緒正しい家柄だ。

大和国は百年間鎖国が続いていたと言うのに、その噂は世界中に広まっている。

鎖国が解けた後は遠く異国の旅人が、奉納するときにおこなわれる祭りを舞目当てに見に来るほどである。

正確には、舞と歌なのだが、とにかく、アルトはそんな音川家の次期当主であり、音川に伝わる舞を舞う巫女であった。

もちろんただの舞いではない。舞う事で世界に干渉し、魔法のような現象を起こす。

シャラン……と、鈴が軽やかに響く。

アルトの巫女服には幾つかの鈴が隠されているのだ。

「輝きの舞い、華虹烙……」

小さくつぶやくと、顔を上げて一呼吸……舞った途端、世界が一転する。

光がそこかしこから現れた。

シャン、シャン……。

アルトが腕を振るたび、足を動かすたびに鈴の音色が鳴り響く。

それは……美しい舞だった。

蛍のような光がアルトと玻璃を守るように現れては点滅し、薄くな

ってはまだ光る、そんな間をアルトは舞い続ける。

少し大技かました方が良いかな……？

そう、アルトは判断する。

「アルトっ！」

「え？」

玻璃の声に気がつくのと、いつの間にか後ろに回り込んでいた骨が手の鎌を振りおろそうとしているところだった。

「光矢っ！！」

瞬間にまわりを漂っていた光が矢のように高速で骨を貫き、穿つ。舞によって創られた光が、次々に骨襲う。

骨が折れ、粉々に散っていく。が、まだ完全に壊れない。

骨は、怒ったように口の部分らしきところを開き吼える。

「ガアあうウああアああアっ！！」

「ちょ、声でるの！？」

骨だけなの！？！

「伏せてっ！」

思わず耳をふさいだアルトの前に躍り出たのはまわりに雷を纏った雷華だった。

「近づくんじゃないわよっ！！！！！！」

バツ、と一面に光が広がり、雷がそれこそ華のように骨に降り注いで消えた。

今度こそ、ばらばらになって四散する。

「あ、ありがと。雷華」

「うん」

雷華は嬉しそうに笑って答えた。

「アルト、こんなのになまちまとやらないで、ばつとやらない？」

「うん。そうだね！！」

そう言うのと、柏手を一つ叩く。

そしてもう一回。

「行くよ。神鳴の舞い、雷華！！」

アルトの舞いと共に、雷の華が咲きほころんだ……。

「うっわー。派手にどんぱちやってんなー」
木々の向こうで、霧に包まれてもなお見る事が出来る雷の光に、少年は露草色に瞳を細めると青年に言った。

「そうですね」

淡々と答える青年は、眼鏡を押さえた。

「加勢しなくていいのか？」

腰の剣を叩いて示す。

「そんな状況だと思っているんですか？」

「……えっと、ごめんなさい」

「残りの時間は？」

「……あの、後三日です」

「貴方がやるべきことは？」

「……その、宝珠の奪還です」

では、いきますか。

そう言っ、さっさと森を歩き始める青年。

「お、おい！いくらなんでもそれはないだろ、テイル！！」

青年の名はテイル・クージス。

なんでも屋、星原で働く錬金術師兼医師見習いであった。

そして少年の名は、竜王。今回の依頼内容の重要人物。

竜王のせいでこんどの事件が起こってしまったと言う事で、テイルやラピス達には頭が上がらない。

まあ、因果応報だろうとテイルは考える。

「今のうちに入り込まないと、本当に死にますよ。それに、あの人
たちなら大丈夫ですよ。あなたが思っているほど弱くないんですか
ら」

それだけ言っ、さっさと行ってしまっ。

「……アルト。来ているのか……」

何とも感慨深い。

もう一度激しい魔術戦が行われていると思われる方を見ると、祈る
ように目を閉じた。そして目を開くと、前を向いて歩き始めた。

「……」

もう、振り返らなかった。

「はっ!!」

最後の骨を玻璃は粉々に砕いた。

「これで、おわりかな？」

ざっと周りを見渡すが、もう骨やら何やらが現れる事はなかった。森からなぜ骨軍団が現れるのか、まったく分からない。

まさか、この骨達に村の人は襲われた？

「これって、神隠しじゃ無くて、誘拐じゃね？」

「え、骨達に村の人達誘拐されたの?!」

玻璃の言うとおり、それぐらいしか考えられない。

もしくは、殺されたか。

でも、この村には一人っ子一人いないし、もちろん死体なんてない。とりあえず、どうしてこんな骨が森から？

カタッ。

変な、音がした。

なんの音か、わからずあたりを見回すが、音の出所はわからない。

「ちよっと、待って。見て!!」

雷華が、ばらばらになった骨を見て叫んだ。

「どうしたの？」

骨だった。

正確には、砕かれた骨片がばらばらになりながらもどこかに行こうと動き出したのだ。

「え？」

「ちょ、気持ち悪いんだけど。なにこれ……」

雷華が薄気味悪そうに、アルトの後ろに隠れた。確かに、気持ち悪いことこの上ない。

「アルト、追うか？」

「……うん」

でも、骨達が村人たちの行方不明に関係していることは確実だ。骨たちは森に向かって動いて行く。

「行こうっ！！！」

どうしてこうなったのか、きちんと調べないと。

——その数分後。

「って、張り切って言ったのまでは良かったんだけどさ……ここ、何処？」

「んー。どこだろね？」

目の前には鉄格子。後ろと両脇に灰色の壁。

「よし、ここまでの事を考えてみようか」

ここまでの事……。

アルトたちは翠螺の村に来た。

そしたら骨に襲われた。

その骨を追って森に入った。

そう、それからだ。

霧が出ていた森に入ると骨を追い続けた。どれほどたったかわからないが、そのうちになんの変哲もない場所で、突然落ちた。

どこに？　ここに。

……つまり、落とし穴にはまって落されて此処に至る。

因みに、雷華は浮いていて落ちなかったためにここには居ない。

「なんて原始的な罠にはまったんだっ！！」

「でも楽しかったよ？」

びゅーんって、落ちたの楽しかったな。

「何でアルトはそんなにノーテンキなんだっ！！」

「え、はり？」

どしたの？

「お前な……捕まったんだぞ？ 檻の中だぞ？ もっと慌てろ」

「……慌てたほうがいいの？」

「いや、無理にとは言わないけど」

慌てた所で、どうにもならない。

ということ、アルトは鉄格子の前に立つと、言った。

「わかった。じゃあ、これ壊す」

「は？」

「うぬぬぬぬ！ うにああああ！ まっがつれーっ！！」

「いや、曲がらんだろ」

玻璃に冷静につつまれてもなお、アルトは鉄格子をつかみ奇声を発しながら曲げようと無駄な努力をしていた。

「アルト、やめとけ」

「だって、だって、……曲りそうじゃん！！」

鉄はびくともしていない。

「曲がらないから！！」

「むー……」

「むー、じゃない」

「うー、……？」

会話を止める。

不思議そうに檻の外を見た。

足音が道の果てから聞こえてきた。

「だれかいますかー？」

そう叫ぶと、その足音はゆっくりとした歩みを走りに変えたのがわかった。

現れたのは青みがかった髪にきれいな露草色の瞳の……見た事が、ない少年だ。

しかし、どこか懐かしい……？

「アルトっ?!」

「へ？」

何故かその少年はアルトを見て名を言った。

やっぱり知っている人？

でも、アルトの記憶には無い。

「な、なんで、お前……が……」

玻璃の、声。

愕然と彼を見つめていた。

「玻璃？」

「なんでお前がっ——」

「竜王様、いきなり走らないで下さいよっ!!」

後ろから、もう一人。こちらも見つた事のない青年だ。

羨ましい程身長が高い人。

彼はアルトを見て、玻璃を見ると眼を丸くした。

「玻璃？」

「テ、テイル？」

「え？ あ？ 知り合い？」

あれ？ りゅうおうさまとかいう人はアルトを知ってて、アルトは知らなくて、玻璃はりゅうおうさまと知っている？を知っていて、てるも玻璃を知っていて……。

「あると以外はみんな知り合いっ!？」

「あ、すいません。音川の姫様ですよ、はじめまして。僕、テイル・クルジスです。テイルって呼んで下さい。こっちは……いちおと、竜王様って呼んで……ください」

「なんでそんなに嫌そうに言うんだっ!! それと、その……はり？ って誰？」

「あ、音川あるとです。はじめまして」

「俺の事、無視か?!」

鉄格子を挟んであいさつし合う人々。

竜王が抗議の声を上げるが、まったく気にしないテイルにちょっと驚く。

「あ、すいません。僕達先を急ぐので、行きますね。ほら、竜王様？ 行きますよ？」

「え、ちょっと、ア、アルトー！」

竜王様とか言うのが、なぜ自分の事を知っているのか分からないが、知らない人なので返事はしない。

「はいはい、さっさと行きますよ。さようならー」
去っていく二人。

テイルは竜王を引きずり先をいそー

「って、ちょっと待て！！ テイル、お前はこの状況に何も突っ込まないのか？ てか、助けはないのか？！」

「え？」

テイルは、閉じ込められている玻璃とアルトを改めて見て、気づく。
「なんで閉じ込められてるんですか？！」

「こっちが聞きたい！！」

テイルはやっぱり竜王を引きずりながら急いで戻ってきた。

「骨を追いかけたら、落ちたの」

簡単に言うのと、そう言う事。

それに、玻璃は何もつつこめない。

正確には、つつこむ氣力を無くしていた。

「それは……えっと、ご愁傷様って言うべきですか？」

「とにかくそういう事なんだけどさ、助けてもらえないか？」

「はい」

鉄格子を挟んで渡されたのは小さな鍵。

「これで開くと思いますよ」

「……最初から渡せよ。つか、なんでそんなもんもってんだよ」

呆れた玻璃は、礼を言いながらも文句を言う。

「ははっ。さつきちよつとぱくって……まあ、いいじゃないですか」

「いま、ぱくったとかいったよな」

「んじゃ、僕たちは行きますね」

「……おい、ぱくったとかいったよな」

「あ、ありがとうございます。えっと、くーじさん？」

「テイルで良いですよ。では。ほら、行きますよ、竜王様」

そう言っ、今度こそほんとに二人は行ってしまった。

「……」

「ちょっと良い？」

玻璃は鉄格子の前に行くと、手を出して何やらやり始める。

「……？」

ガチャリ。

「あ、開いた！」

「んじゃ、とにかく出口を探そうか？」

「うん！」

二人は灰色の迷宮に足を踏みだした。

同じく、灰色の迷宮を歩くテイルと竜王の二人組はなおも進み続けて、分かれ道に出た。

「……竜王様って音川の姫様と知り合いだったんですね。あ、どっちに曲がるんですか？」

「まあ……本人解ってなかったけど。えーっと、左」

「その姿じゃ、わからないですよ」

「だよなー」

先ほどのアルトと玻璃の話題に盛り上がりながらも、歩く。

右も左も灰色の道を歩き続ける。

時々扉などがあるが、先頭を歩く竜王は気にする事も無く進む。

「玻璃だっけ？ あいつ、コイツと仲悪いの？」

自分を指しながらテイルに問う。

「え？ さあ？ でも、玻璃が星原にいたのはマコトの来る前ですから、知らないはずなんですけど……。まあ、マコトを一番知っているのは陸夜さんですから、そちらに聞いてください」

「ふーん。……面倒事になりそうだな」

「……そうですか？」

少しの沈黙。

「あ、ここか？」

一番奥のつき当たりにあった扉の前で竜王とテイルは立ち止った。

霧に包まれた森に、独りで彷徨う精霊が一人。

「あわわわっ。アルト？ アルト？？ アールトー！？」

少女を心配する精霊は一人残された雷華であった。

先ほどまでアルトが立っていたはずの地面に向かって呼びかけているが、もちろん答える声はない。

「うううう。アルト………。……クソ。此処ノ神は何やっていやがるんだ」

それまでとは打って変わって冷酷な表情。

それはアルトの前では、けして見せないもう一つの姿。

いらいらと舌打ちすると、周りを確認する。

誰もいない。

そう、ヒトも雷華と同族の精霊も。

「約束は……守らないと……」

自分に言い聞かせるかのようにそうつぶやくと、雷華はサッと姿を消してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3813ba/>

神騙り

2012年1月12日21時53分発行